博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	渡辺　雅哉
論 文 題 目	改革と革命と反革命のアンダルシア ―「アフリカ風の憎しみ」、または大土地所有制下の階級闘争 （1868－1939 年）―

審査要旨

本論文は、19 世紀後半の第 1 共和制期から 20 世紀前半の内戦期にかけての、スペイン・アンダルシア地方の農業問題を中心にした階級闘争を、関連史料や研究文献をもとに分析した研究である。とりわけアンダルシアにおけるアナキストやアナキズムを軸にその展開や軌跡を辿ることに主眼が置かれている。本論文は、「はじめに」、第 1 章～第 9 章、「むすびに代えて」から構成され、末尾に地図と参考文献がのせられている。

「はじめに」では、ディアス・デル・モラールによる代表的な先行研究などに触れながら、全体の時期を通した本稿における研究分析の流れと研究課題が提示されている。すなわち本稿では、近現代スペインにおける農民騒擾史に着目し、まず 1868 年の 9 月革命から第 1 共和制期（1873－1875 年）へ、そして復古王政期（1875－1931 年）を経て第 2 共和制期及び内戦期（1931－1939 年）にいたるまでの時期が対象となり、「アフリカ風の憎しみ」とも形容されるこの地方独特の労使間の階級憎悪が深化し、内戦の破局へと展開してゆく過程を分析することが研究課題とされている。第 1 章「砂上の楼閣？/マヌエル・アサーニャとスペイン第 2 共和制の崩壊」では、全体の議論の中心となる 1930 年代のスペインの状況について、この時期の大統領マヌエル・アサーニャの政治活動を軸に分析し、第 2 共和制が 1936 年の軍事クーデタによって崩壊を余儀なくされる政治過程が辿られる。第 2 章「アンダルシア/「ヨーロッパで最も不幸な人々」の末裔たちがのたうつ土地」では、スペイン南部のアンダルシア地方の農業問題に焦点をあてた本稿の実質的な分析が始まり、大土地所有制が 19 世紀前半から確立されていく過程で、悲惨な農業プロレタリアートが生み出されていく状況が明確にされる。第 3 章「リベルテールたちのアンダルシア/「マノ・ネグラ」騒動から「ボリシェヴィキの 3 年間」まで」では、1880 年代から 1910 年代末ボリシェヴィキの 3 年間(1918－20 年）にいたるアンダルシアの労使間の階級対立の展開とその激化が語られる。第 4 章「「純粋」アナキズムの系譜/サルボチェア、サンチェス・ロサ、そして「コルドニエフ」」では、この時期のサルボチェア以下の「純粋」アナキストたちの活動の浮き沈みと「土着の社会主義」に着目する。第 5 章「帝政ロシアよりも劣悪」？/アンダルシアのカシキスモ、共和制とリベルテール」では、アンダルシアにおけるリベルテール的（アナキスト的）な理念の浸透が、南スペインに巣くうカシキスモ（地方ボス支配）との関係で掘り下げて論じられる。

第 6 章「カストロ・デル・リオとブハランセ/FAI 派と第 2 共和制期コルドバ県の階級闘争」では、第 2 共和制期のコルドバ県に焦点をあて、社会党・UGT(労働者総同盟)や CNT（全国労働連合）をめぐる農業労働運動の推移のなかで FAI（イベリア・アナキスト連盟）の橋頭堡が構築される過程が分析される。第 7 章「第 2 共和制農地改革の限界/ディアス・デル・モラールと「アンダルシアの農業問題」」では、コルドバ県選出の代議士ディアス・デル・モラールの農地改革「私案」を取り上げ、インテリゲンツィヤと社会党・UGT との階級的な隔たりや、FNTT（全国土地労働者連盟）による大規模な農業ストライキ攻勢が失敗に終わった状況が明確にされる。第 8 章「社会カトリシズムの敗北/サルバドール・ムニョス・ペレスとアンダルシアの反革命」では、「改革の 2 年間」（1931-33 年）に代わった「暗黒の 2 年間」（1934-35 年）に、社会カトリシズムの精神への回帰をもくろんだ CEDA(スペイン独立右翼連合)のヒメーネス・フェルナンデスの挫折とムニョス・ペレスらの第 2 共和制打倒の策謀が語られる。第 9 章「ヘレスからバーサへ/アンダルシアの FAI 派と「アンチ・サルボチェア」たち」では、20 世紀初頭から内戦が終わるまでの間の、アンダルシ

氏名　渡辺　雅哉

アにおける「純粋」アナキストとサンディカリストとの対立・抗争が包括的に展望される。「むすびに代えて」では、本稿の概略を述べた上で、その後のフランコ独裁期の弾圧の実態が語られ、記憶も封印されていく流れが跡付けられている。

本論文は、わが国のこれまでのスペイン現代史研究の中で必ずしも明らかにされていなかった19世紀後半から20世紀前半のスペイン南部アンダルシアにおける農民・農業問題、階級闘争に関する本格的な研究である。従来の研究では、「プエブロ」（町や村）の底辺に位置する日雇い農とアナキスト・アナキズムの関係が「空白」のままになる場合が多かったが、本論文ではその「空白」を埋めることに尽力し、加えて「農業エリート」の実態が明らかにされた。これによって、①改革を志向するブルジョワ共和制勢力と社会カトリシズム勢力、②革命的な変革を志向するアナルコサンディカリズム勢力とマルクス主義勢力、③頑強に抵抗する農業エリート勢力という、この時期の重層的な階級闘争の当事者たちと、それら相互の関係が明確にされた。とりわけ「純粋」アナキズムの流れがサンディカリズムの勢いが強まった時期にもかなりの影響を及ぼしていたという本論文の指摘は、これまでの研究史上の通説的な理解に修正を迫るものである。

さらに本論文の評価すべき点は、その高度な実証性の追究にある。本論文では、主として対象とする地域をコルドバ県とその周辺に絞り込み、先行研究はもちろん膨大な未刊行史料や新聞記事、パンフレット、回想録等を丹念に読み込んで利用し、徹底して圧倒的な史料実証主義が貫かれている。また研究方法としては、このようなアンダルシア社会の病理を暴く社会史と、アナキスト中心の特異な政治史との両面にわたる検討・考察が総合的に幅広く展開されており、緻密で高度な分析の手続きともあいまって、わが国の今後のスペイン現代史研究の中で、必ずや重要な研究史的位置づけがなされる論文であると思われる。

しかしながら、本論文では、同じ時期にアナキストの運動が展開されたカタルーニャの例などに関する考察が必ずしも充分なされていない。農業を基盤にしたアンダルシアと、商工業を基盤にしたカタルーニャの事例研究などをふまえることにより、今後スペイン・アナキスト史の全貌が明確になるであろう。また、アンダルシア農民と農業に関する実態分析もやや不充分である。この時期の農民が、土地所有や労働をめぐって、例えば不在地主から土地管理を任された「代理人」といかなる関係にあったのか、その生活実態はいかなる状況であったのか、より社会史的、日常的な状況に関する言及が必要である。さらに、本稿の分析が、人物史、組織史、事件史、イデオロギー・理念史中心の展開でやや一面的になっている点や、本論文の章構成が必ずしも時系列的に配置されておらず、論者の分析的なこだわりに基づく叙述スタイルやその文体が逆に読解を妨げている箇所が見られる点など、なお推敲の余地を残していると思われる。

しかし、これまであまり顕著な研究実績のないスペイン近現代史の主要テーマである、アナキズム、農業改革、第２共和制、そしてスペイン内戦の本質を抉り出した本論文の学術的価値は非常に高いと評価される。

公開審査会開催日	2015年　9月　26日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏　名
主任審査委員	早稲田大学・教授		フランス近世・近代史	森原　隆
審査委員	早稲田大学・教授		ドイツ現代史	大内　宏一
審査委員	横浜商科大学教授		スペイン現代史	渡部　哲郎
審査委員				
審査委員				